



目 次

スローな図書館ライフのすすめ・・・・・・・・・・1	平成17年度図書館統計・・・・・・・・・・6
学術情報機構から大学情報機構に・・・・・・・・4	トピックス・・・・・・・・・・8
新入生ガイダンスを実施しました・・・・・・・・5	本学関係教員著作物寄贈図書・・・・・・・・12

スローな図書館ライフのすすめ

山口大学図書館副館長(人文学部教授) 根ヶ山 徹

山口大学の図書館は、先人達の知の結晶を蓄積し、継承してきた。また、新たな知の創造に寄与するという重要な役割をにないつつ、大学の歴史とともに歩んできた。まさしく、山口大学の知的シンボルといえることができる。

時代の推移、そして学問領域の拡大により、図書館が架蔵する蔵書は、内容、数量ともに増加の一途をたどってきた。ところが、平成にはいって、インターネット利用システムが導入されてからというもの、それまでには想像もできなかった状況が展開している。もはや、今日の図書館は、これまでのように膨大な蔵書を誇るだけではなく、それらを情報としていかに活用し、また公開するかという、新たな課題を課せられることとなったのである。

時代の変化のスピードは速く、数多くのデー

タベースが作成され、縦横な検索が可能になってきた。インターネットや電子データを用いれば、わずか数秒の間にパソコン画面に検索結果を得ることができるのである。

その一方で、辞書や索引のたぐいを手がかりにして、あるいは目的の知識を得るためにさまざまな書物をひもとくことも忘れてはならない。書物を渉猟した分、広い知見を得ることができるし、また、深い思索の時間を持つことができるであろう。無機質なデータの羅列とは異なり、書物を主体とし、煩瑣な手続きをへて、はじめてあじわうことのできる醍醐味である。そのためにも、図書館はこれからも十全な機能を備えていなければならない。

時代の変化に対応しながら、一方で基本的な機能が十全に備わっていてこそ、「知識と人間性を追求する全ての人を支援する」という、山口大学図書館がかかげる理念の具現化につ

ながるのではないか。

筆者が、もっとも密接に図書館と係わったのは、かつて北京に長期滞在した時のことである。中国古典文学を専攻し、中国の古典籍なしでは過ごせない日々を送っていることから、ほとんど毎日のように北京図書館(今の中国国家図書館)善本特蔵部に足を運んだ。そこでは、緋色の毛氈が敷かれた机の上に、龍の彫刻が施された書見台を置き、かずかずの善本をひもとくという至福の時間を過ごすことができた。この時、書物には、たんに文字が刻まれているだけではなく、時代相を反映する刻字の形状、実際に手にとってみなければわからない紙質、そして装丁の様相、書物の遍歴を記録する蔵書印など、計り知れない情報がつめこまれていることを、あたらためて認識することができた。

善本といえば、山口大学にも貴重な古典籍が数多く所蔵されている。

総合図書館蔵棲息堂文庫は、徳山毛利家第三代藩主毛利元次(1667~1719)の旧蔵書である。

たとえば、明末の行商人のための路程手引き書であり、同時に商人倫理を記した『新刻合併客商一覽醒迷天下水陸路程』8巻(崇禎8年[1635]刊本)、明末の戯曲の脚本である『塩梅記』2巻(明末漱玉山房刊本)などは海内の孤本である。明の単本が注解を施した杜甫の詩集『読杜詩愚得』18巻(李朝明宗4年[1549]銅活字本)の伝存はきわめて稀である。

いずれも、山口大学の誇るべき資産と言い得よう。

また、王世貞の詩文集『弇州山人四部稿選』存巻6・7・8(延享5年[1748]刊本、東亜経済研究所蔵)の各巻首には「村田之印」の朱印が捺されており、幕末期に長州藩の家老であった村田清風(1783~1855)の旧蔵書であることが明らかである。

『五代史記』(万暦4年[1576]刊本、総合図書館蔵)には、巻首の上欄に「思永館」「奇兵隊印」



「奇兵隊印」「思永館」



上・竹添井井蔵書印
右・富岡鉄斎蔵書印



が捺されている。高杉晋作(1839~1867)ひきいる奇兵隊が、慶応2年(1866)第二次長州征伐の際に、小倉藩藩校の思永館から戦利品として持ち帰ったものである。両印の雅俗のへだたりの大きさは、興味深いところである。

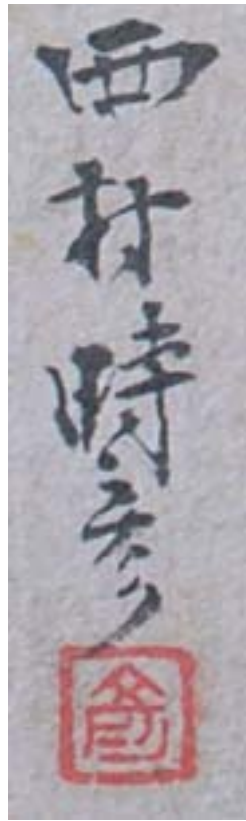
『拙軒集』(清乾隆間「武英殿聚珍版」、人文学部蔵)は、竹添井井(1842~1917)の旧蔵書である。竹添は、明治期有数の漢学者・詩文家であり、外交官として当時の清国に滞在した明治9年(1876)5月、北京を出発して河南、陝西を経由し、蜀の栈道をのぼり、三峡を下って上海に到着するまでの百余日の旅の記録『棧雲峡雨日記』の著者である。

『居易堂集』(嘉慶20年[1815]刊本、総合図書館蔵)には、著者徐枋(1623~1694)の略伝が、近代日本を代表する文人画家富岡鉄斎(1837~1924)によって墨痕あざやかに記され、数種類の蔵書印が捺されている。題簽も鉄斎の手になる。

『雑劇十段錦』(民国2年[1913]南蘭陵董氏誦芬室刊本、総合図書館蔵)には、大阪の文化界で活躍し、「天声人語」の名付け親ともされる大阪朝日新聞の記者であった西村天囚(1865~

1924、本名は時彦)の識語が記されている。光緒16年(1890)の進士で、刑部郎中・大理寺推丞に任官した董康(1867~1947)から、嘉靖37年(1558)紹陶室刊本の景印本二部を贈られ、うち一部を泊園書院(中井氏一族の懷徳堂、緒方洪庵の適塾と並び称された大阪の私塾)の藤澤黄鵠(1874~1924)に贈呈するという内容である。

これらは、さまざまな理由で山口大学の所蔵となっているけれども、先人の蒐書の軌跡を知ることができる貴重な資料となっている。



西村天囚署名

漢籍ばかりを例示したが、和古書を含むこれら古典籍の多くは、残念なことに必ずしも良好な状態にあるとは言い難く、乾燥による紙質の変化や虫損により、はなはだしく傷んでいるものもある。こうした古典籍の免れがたい宿命を現時点で押しとどめるための唯一の手段は、裏打等の補修をおこなったうえで、写真に撮影し、画像データベースを作成することであろう。タリバンによって破壊されたパーミヤンの石窟が二度と原状復帰できないのと同じように、古典籍類もいったん朽ち果ててしまったら、修復は不可能である。何よりも現物が存在することに意味があるのである。

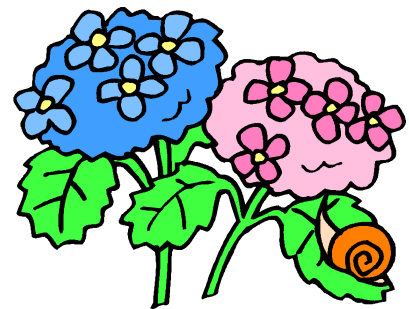
これからの図書館には、貴重な蔵書の展示公開など、広く門戸を開くことが求められるであろう。わが山口大学の架蔵する古典籍のデータベースが、山口大学学術機関リポジトリ YUNOCA に公開されれば、教育資源の社会へ開放として

大きな意義を有する。

筑紫哲也『スローライフ—緩急自在のすすめ』(岩波新書1010、2006年)は、「人間の七倍速で生きる犬、二〇倍速?で生きるねずみのように速く生きないと、日々、進歩する技術には追いつけない、というのだ」(196頁)と、快足の進歩のみを信奉するIT社会に警鐘を鳴らし、「もはや『アリとキリギリス』のイソップ寓話は通用しなくなったと言われる。コツコツと働き続けるアリは愚者のようであり、キリギリスのように派手に振る舞う者が脚光を浴びる」(同上)という、「勝ち組」の思想に疑問を投げかける。

何ごととも手間隙をかけることは、本質を究めるうえで極めて大切なことである。スピードや効率優先の時代であればこそ、じっくりと書物をひもとくことができ、人生に潤いをあたえてくれる図書館の存在は、従来にもまして重要になってくる。

(ねがやま とおる)



学術情報機構から大学情報機構に

平成 17 年度までの学術情報機構は図書館、メディア基盤センター、埋蔵文化財資料館の 3 施設で学術情報を扱う組織であった。しかし、教育研究活動のみならず、大学業務全般においても IT 化が進み、学術情報や事務・教務情報などがデータベース化され、ネットワークを介して利用されるようになってきているため、学術情報は学術情報機構が、事務・教務情報は事務情報化推進室が担う態勢ではなく、教育研究活動や大学経営の成果としての各種情報のデータベース化や利用のためのシステム化を統一的かつ効率的に推進することが必要となってきた。

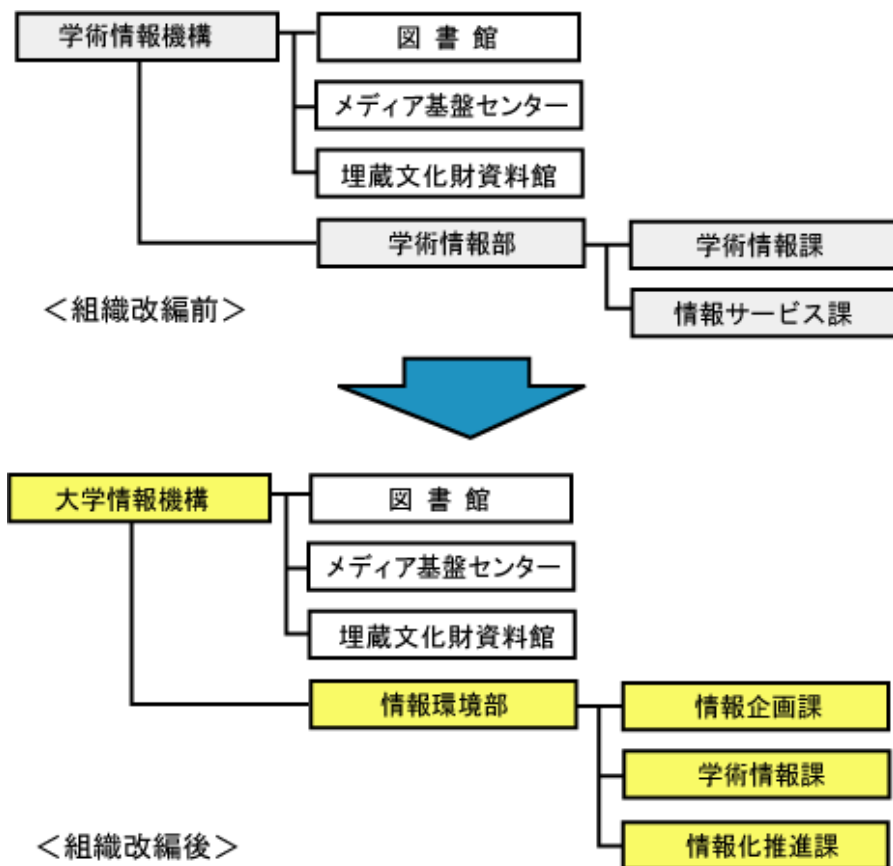
このことから大学情報の流通マネジメントを一元的に推進するために総務部総務課事務情報化推進室を学術情報部に統合し、「情報環

境部」として 1 部 2 課から 1 部 3 課に。また「学術情報機構」を「大学情報機構」に組織改編した。

部局、各セクションで生産された情報を維持管理するためには、データベース化やデータベースに各部局が入力するための入力インターフェース、入力された集積情報の管理システム、利用させるための出力インターフェースの構築及びこれらの維持管理が重要であり、この大学情報の流通システムの運用が大学情報機構の使命である。

大学情報の生産者であり、利用者である各部局、各セクション間での効率的な情報流通システムを構築するための各部局との調整マネジメントが大学情報機構の重要な任務である。

(学術情報課長 大元利彦)



新入生ガイダンスを実施しました

平成18年4月3日より10日まで、本年度入学の新入生を対象としたガイダンスを行いました。参加者は1897名で、参加率は91%でした。学務部及び各学部の教務担当の支援・協力を頂き、今年も高い参加率で実施することができました。

このガイダンスの目的は、大学図書館の機能を理解してもらうことと、インターネット等のネットワーク活用の初歩を理解してもらうことです。

特にインターネット利用上の注意点については、メディア基盤センター教員に協力頂いて、

ネットワークマナーブックの解説を含んだミニ講習会的な説明を行っていただきました。

参加者の反応は「何気なく使っていたけど、著作権や個人情報には気をつけないと」や「ちゃんと理解して使う必要がありますね」といった声が聞かれました。

その後は図書館の基本機能を説明しながらの館内ツアー（約30分）を行って、情報コンセントや資料の配置等を見せて回りました。

高校や公共図書館との違いに戸惑いを見せながらも、カードによる入館方法や自動貸出返却装置の使い方を興味深く見ていました。

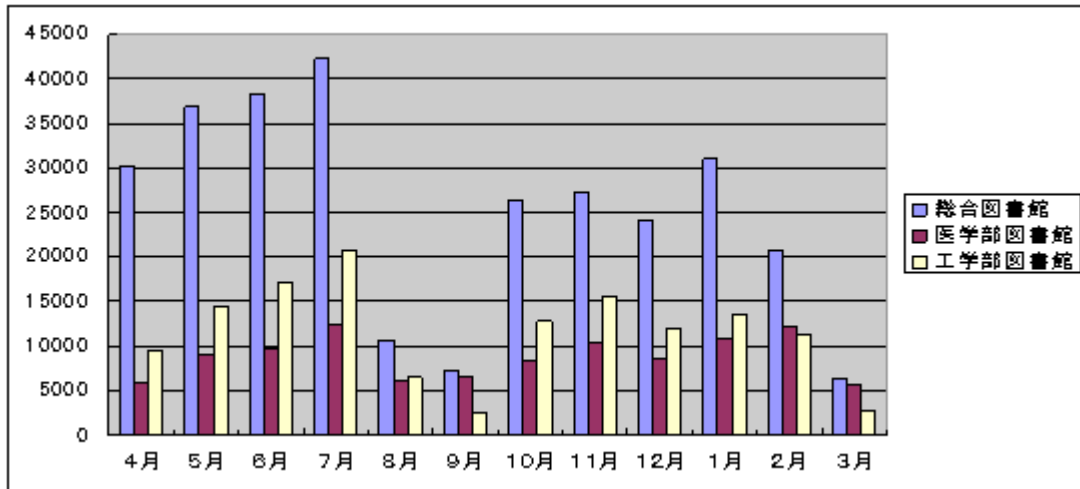
(情報サービス係)



ガイダンスの様子

平成 17 年度図書館統計

入館者統計



総合図書館
学外者 2% 教職員 2%



学生 96%

医学部図書館
学外者 3% 教職員 6%



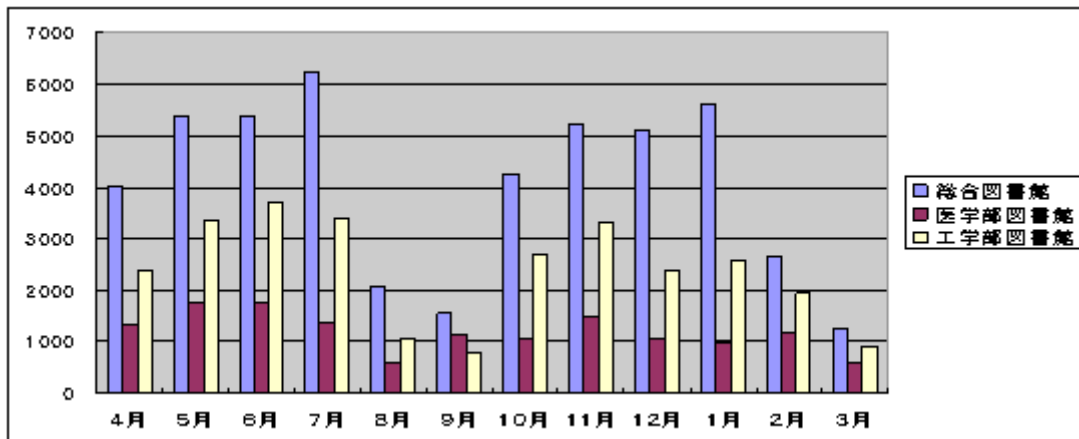
学生 91%

工学部図書館
学外者 2% 教職員 2%



学生 96%

貸出数統計



総合図書館
学外者 1% 教職員 6%



学生 93%

医学部図書館
学外者 1% 教職員 20%



学生 79%

工学部図書館
学外者 1% 教職員 7%



学生 92%

平成 17 年度図書館ベストリーダー

<平成 17 年 4 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日の期間で貸出された図書のベスト 10>

総合図書館 ベストリーダー TOP 10	
1 位	固体物理学入門 / Charles Kittel [著] ; 宇野良清 [ほか] 共訳 ; 上
2 位	基礎地球科学 / 西村祐二郎編著
3 位	Essential 細胞生物学 / Bruce Alberts [ほか] 著 ; 中村桂子, 藤山秋佐夫, 松原謙一監訳
4 位	細胞の分子生物学 / Bruce Alberts [ほか] 著 ; 中村桂子, 藤山秋佐夫, 松原謙一監訳
5 位	TOEIC テストリーディング完全攻略法 : これでキメよう! 文法・語法長文読解
6 位	教育心理学の基礎知識 / 河合伊六 [ほか] 編
6 位	最新運動生理学 : 身体パフォーマンスの科学的基礎 / 宮村実晴編集
8 位	情報理論 / 佐藤洋著
9 位	固体物理学入門 / Charles Kittel [著] ; 宇野良清 [ほか] 共訳 ; 下
10 位	身体運動の生理学 / 猪飼道夫編著
10 位	運動処方のための心拍数の科学 / 山地啓司著
医学部図書館 ベストリーダー TOP 10	
1 位	標準放射線医学/高島力, 佐々木康人監修; 中田肇[ほか]編集; 中田肇[ほか]執筆
2 位	標準眼科学/大野重昭, 澤充, 木下茂編集; 澤口昭一[ほか]執筆
3 位	標準泌尿器科学/小磯謙吉監修; 折笠精一, 香川征編集
4 位	ベッドサイドの神経の診かた/田崎義昭, 斎藤佳雄著
5 位	標準精神医学/野村総一郎, 樋口輝彦編
6 位	SuperHospital 麻酔科/村瀬澄夫監修; 丸山一男編集
7 位	血液細胞アトラス/三輪史朗, 渡辺陽之輔共著
8 位	標準皮膚科学/荒田次郎, 西川武二, 瀧川雅浩編集
9 位	実践臨床心臓病学/吉川純一, 松崎益徳編集
10 位	ベッドサイドの神経の診かた/田崎義昭, 斎藤佳雄著
10 位	神経疾患 (病態生理でできた内科学 / 五幸恵著 : Part 5)
工学部図書館 ベストリーダー TOP 10	
1 位	なっとくするフーリエ変換 / 小暮陽三著
2 位	乱流現象 / 中村育雄著
3 位	機械流体工学 : 工学基礎 / 中村育雄, 大坂英雄著
4 位	伝熱工学 / J. P. ホールマン著 ; 平田賢監訳 ; 上
5 位	工科系流体力学 / 中村育雄, 大坂英雄著
5 位	土質力学 : 考え方解き方 / 近畿高校土木会編
7 位	材料力学 / 宮本博, 菊池正紀共著
7 位	Student's solutions manual for physical chemistry / P. W. Atkins ... [et al.]
9 位	レーザの基礎と応用 / Donald C. O'Shea et al. ; 望月仁, 姫野俊一, 浜本佳彦共訳
10 位	噴流工学 : 基礎と応用 / 社河内敏彦著

トピックス

●自動貸出返却装置の新設

平成18年4月10日(月)から、総合図書館に自動貸出返却装置が1台新設されました。

今までの自動貸出装置の機能に加え、貸出期間の延長や返却処理まで自分で行うことが可能となります。自動貸出装置が2台となったことで、図書館カウンターでの利用者混雑の解消・緩和に期待ができます。

皆様も貸出・返却の際は、どうぞ新しい自動貸出返却装置をご利用下さい。



貸出の延長もできます

●「七人の文豪展」に資料出品

本学図書館にはメーテルリンクの「青い鳥」の初訳者としても知られている人形浄瑠璃研究の第一人者の若月紫蘭(本名:藤本保治、1879~1962)の蔵書が若月紫蘭文庫として寄贈されています。

この中の数点が「七人の文豪展」(平成18年3月10日~4月2日、防府アスピラート)に出品されました。

その中に若月紫蘭の東京帝国大学英文科時代の直筆講義ノートがあります。

若月紫蘭が学んだ時、最初の講師はラフカディオ・ハーンで、次が英国から帰国した夏目漱石でした。

ハーンの講義は非常に分かりやすく学生に好評でしたが、漱石の講義は非常に難解すぎるために不評で、後に大学を去り、作家に転身することとなった要因の一つではないかといわれています。このことから、文学史上のエピソードに遭遇しているかもしれないノートとして注目されました。



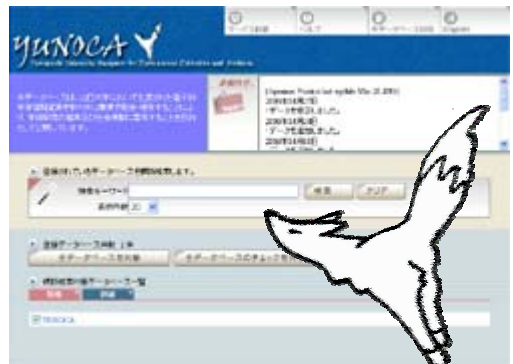
若月紫蘭の直筆ノート

●「YUNOCA」の試験運用スタート

本年度より、山口大学学術機関リポジトリ、「YUNOCA (Yamaguchi University Navigator for Open access Collection and Archives)」の試験運用を開始しました。

「YUNOCA」では、山口大学で生産された学術研究成果を電子的な形態で蓄積・保存し、無償で山口大学内外に発信することを目的としています。

まだ試験公開のため、一部の機能、一部の閲覧しかできませんが、教員の皆様には、ぜひともシステムにアクセスして、「YUNOCA」をご覧頂きたいと思えます。



「YUNOCA」

<http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/>

●図書館カウンター業務の外注化

近年大学図書館を取り巻く状況は厳しく、業務の多様化、専門化、細分化、それと同時に人員削減、予算削減等、図書館経営上必然的に合理化を推進して行かざるを得ない状況にあります。このような状況下、山口大学では以前から外注について先行大学の事例等を参考に部内で検討を行い、その結果、平成18年4月より時間外カウンター業務を業務委託しました。委託業務では学生雇用の実現化を図れるよう業者と打ち合わせをしてきました。

時間外委託業務(平日17:30~21:45、土日11:15~18:45)には「山口大学図書館平日夜間・休日開館における業務委託仕様書」、「業務マニュアル」を整備しました。また、今後、サービスの低下が起こらないように、館員共々相務めて参りますので、よろしくお願いいたします。



時間外のカウンターの様子

●萩美術館・浦上記念館に資料出品

山口県立萩美術館・浦上記念館で、平成18年6月10日より開催中の「開館10周年記念 浮世絵にみる江戸の風雅と風俗一雅/俗の視点から」展において、本学所蔵の棲息堂文庫から、下記の3点が出品されています。

出品される資料名

「通俗漢楚軍談」1695年

「絵本漢楚軍談」1802年

「源氏こかがみ(小鏡)」1666年

※「通俗漢楚軍談」「絵本漢楚軍談」とは有名な項羽と劉邦の物語です。

●電子図書館国際会議

平成17年8月25日(木)、26日(金)の2日間、名古屋大学野依記念学術交流館で開催された「The International Advanced Digital Library Conference in Nagoya」(電子図書館国際会議)に出席しました。

大学図書館においては、10年前では予想のつかなかった情報化が進み外国雑誌は80%以上が電子化され、図書館機能は益々変わりつつあります。その中で、今後どのような図書館機能を持ち続けなければならないかという国内外からの18名の方々のさまざまなテーマの講演を拝聴してきました。

国際会議ということで、ほとんどの講演は英語により行われましたので、同時通訳が聴けるトランシーバーが唯一頼りの貴重な経験のできた2日間でした。

(情報企画係 池田浩弥子)

●第18回国立大学図書館協会シンポジウム

平成17年11月16、17日の2日間、岡山大学にて開催された、国立大学図書館協会主催のシンポジウム「機関リポジトリ学術コミュニケーション機能回復の新たな方向を探る」に参加しました。

1日目の「機関リポジトリをめぐる海外の動向:研究者との連携」「機関リポジトリをめぐる日本の図書館の動向」という2つの講演では、各大学の機関リポジトリ構築に対する取組み状況等について、事前のアンケート調査の結果をもとに分析、説明がなされ、次に、実際に機関リポジトリを学内に浸透させていくにはどうすればよいか、という方法論を「機関リポジトリのマーケティング」というキーワードをもとに、主に研究者にとっての利便性、有用性という立場から説明がなされました。

2日目はNIIのリポジトリ構築事業にも参加している名古屋、広島、九州、岡山の各大学より、学術機関リポジトリの構築に向けての実際の具体的な作業手法、手順等について事例報告がなされ、今後の参考になりました。

(情報管理係 藏野祐二)

●広島大学図書館学術講演会
「米国図書館職員のファカルティ・ステータス
について：その形成プロセスを考察する」

平成17年11月21日(月)広島大学中央図書館に於いて行われた標記講習会に参加しました。米マサチューセッツ大学図書館司書の Domier 氏が米国の大学図書館員の現状について講演されました。講演会のタイトルにある「ファカルティ・ステータス」とは一定の条件を満たした図書館員に与えられる地位のことで、教員と同等の給与、権利などが得られます。米国の図書館員 (librarian) は図書館学修士号以上を持っていることが前提の専門家集団なのですが、上記ステータスを持つ librarian はその中でも更に専門知識に秀でた突出した存在のようです。

近年日本でも大学図書館員の専門職としての立場を確立しようとの動きがありますが、日本の大学図書館員の大部分は米国で言う「librarian」ではなく専門職として認識されていない「library staff」に当たるようで、米国に於ける様な専門職としての地位を築いていくことの困難性についても考えさせられました。
(工学情報係 木越みち)

●第2回レファレンス協同データベース事業参加館フォーラム

平成18年2月24日(金)、国立国会図書館関西館において開催された、第2回レファレンス協同データベース事業参加館フォーラムに出席しました。全国から170名の参加があり、事業報告、基調講演、参加館からの報告、パネルディスカッションが行われ、フォーラム終了後には、希望者に対して国立国会図書館関西館の書庫見学も実施されました。

大学図書館との関係性から見ると、レファレンス協同データベースの大学図書館からの事例入力は、公共図書館と大学図書館でサービスの役割が異なるため、全体の6%に過ぎないということでした。レファレンスの質を向上させるため、レファレンス協同データベースの可能性を最大限に活用することは有用であり、そのためには、事例の蓄積を進めることをはじめとしたデータベースの充実が不可欠であると感じました。
(情報サービス係 野間恵梨子)

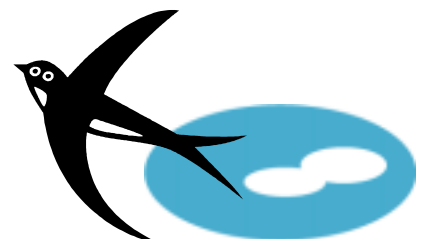
●IC タグ用図書館共通認識コード案に関する説明会

平成18年3月1日(水)日本図書館協会にて「ICタグ用図書館共通認識コード案に関する説明会」が開催されました。説明会では、ICタグ研究会標準化ワーキンググループによる報告がなされ、その後、各大学関係者及び業者を含めた質疑・意見交換がなされました。

説明の内容を聞いた限りでは、コストや作業量から見ても、山口大学としては直ちに導入すべきという事ではありませんでしたが、今後の動向によっては図書管理において重要な役割を果たすようになっていくのではないかと感じられました。
(利用者サービス係 守永盛志)

●機関リポジトリワークショップ
「研究成果ショウケースとしての機関リポジトリ：オランダ"Cream of Science"を中心に」

平成18年5月22日(月)千葉大学附属図書館主催の標記ワークショップに参加しました。前半はオランダの機関リポジトリである" Cream of Science" (科学の精華) プロジェクトに関わった Feijen 氏による講演、後半はCSI事業の一環で海外に機関リポジトリの調査に行った方々による報告でした。海外調査報告では、オーストラリア、ポルトガル、カナダ、アメリカの事例について発表がありましたが、どの国も発展途上でありリポジトリ普及の方法を模索中との印象を受けました。そんな中 Feijen 氏の講演は" Cream of Science" をリポジトリの成功例として位置付けており大変興味深く思いました。成功の要因としては、参加館(オランダの全高等教育機関：13大学、2研究所)の協力があったこと、共通の目的を持って臨んだこと、システムの構築がうまくいったことなどを挙げられていました。現在、EUの枠組みでのリポジトリ構想もあるそうで、今後の動向にも注目していきたいと思いました。
(工学情報係 木越みち)



講 習 会

●電子ジャーナル・データベース講習会

平成17年12月から平成18年3月にかけて、電子ジャーナル・データベース講習会を、医学部、経済学部、人文学部の3学部で行いました。12月14日には経済学部で、電子ジャーナル、Scopus、eol-DB タワーサービスの概要および利用方法について、1月20日には医学部でScopusの概要について、3月3日には人文学部で電子ジャーナル、Scopus、GeNiiの概要および利用方法について講習会を行いました。



電子ジャーナル・データベース講習会（経済学部）

●Ovid 講習会（医学部）

Ovid社より講師を迎え、1月17日午後3回各90分間で、メディア基盤センターにおいてOvid講習会を開催しました。教職員の診察時間・授業時間を考慮し、3回目に時間外の18時から19時30分の時間帯を設け、合計32名の参加がありました。Ovid Medline がリロードされた説明や、EBM Reviews・LWW電子ジャーナルの連動による、広範囲な検索の説明があり、受講者は熱心に耳を傾け、中身が濃いのもっと時間をかけて説明をして欲しいなどの感想がありました。



Ovid 講習会（医学部）

●Scopus 講習会（医学部）

エルゼビア社より講師を迎え、3月23日16時から90分間、総合研究棟でScopus講習会を開催し、24名の参加がありました。Scopusは、4月よりWeb of Scienceに替わって導入された世界最大級の情報データベースで、引用文献へのリンク・フルテキストアクセスなど様々なリンク機能を備えています。当日の講習会は、パソコン持ち込みで行いましたが、無線LAN対応など設定が色々あり、課題も残る講習会でした。



Scopus 講習会（医学部）

